

### 3 当科における胆膵領域超音波内視鏡の現況 (EUS, IDUS, FNA について)

中村 厚夫・佐藤 聡史・八木 一芳  
関根 厚雄

県立吉田病院内科

2006年12月ラジアル型超音波内視鏡(GFUM 2000 オリンパス社製)を購入してから検査が非常に行きやすくなり診断精度も高くなってきた。2007年1月から2008年7月25日までに行った超音波内視鏡の件数は合計280件、うち胆膵領域の件数は202件だった。本年の胆膵領域の件数は現在101件と今年に入りさらに増えてきている。管腔内超音波検査(IDUS)はEUSが増えたことにより13例と少なかった。また本年コンベックス型超音波内視鏡(UCT240 オリンパス社製)も購入、腹部超音波検査装置( $\alpha$ -10 アロカ社製)と接続でき血流診断をしながら安全にEUS/FNAが可能となった。症例数は少ないが消化管4例、胆膵領域5例に施行した。実際の症例を呈示し報告する。(発表時は症例数2ヶ月分追加し報告する)

### 4 膵頭部膵管内乳頭粘液腺癌の2例

上野 亜矢・佐藤 秀一・摺木 陽久  
阿部 要一\*・山田 明\*・佐藤 好信\*\*  
小林 隆\*\*

新潟医療生活協同組合戸病院内科  
同 外科\*

新潟大学大学院医歯学総合研究科  
消化器・一般外科学分野\*\*

〔症例1〕77歳、女性。全身倦怠感にて近医受診。トランスアミナーゼ・胆道系酵素の上昇と、腹部エコーにて肝内胆管・総胆管の拡張を指摘され、当科紹介入院。腹部CTにて胆道系の著明な拡張、膵頭部に6.5cm大の内部に充実性部分が混在している多房性嚢胞性腫瘍を認め、充実部は主膵管内に進展していた。黄疸出現しPTCD施行、下部胆管に粘液が貯留しており、細胞診の結果、class V、腺癌由来と考えられる細胞を認めた。膵頭十二指腸切除術施行、切除標本では腫瘍が胆管に穿破しており、病理検査所見では混合型のIPMCで

あった。

〔症例2〕70歳、男性。心窩部痛にて近医受診。腹部エコーにて肝内胆管と総胆管の拡張を指摘され、当科紹介入院。腹部CTにて総胆管結石、胆嚢底部の壁肥厚、膵頭部に3cmの主膵管と連続している嚢胞性腫瘍、主膵管の拡張を認めた。混合型のIPMNと考えられ、膵頭十二指腸切除術施行、病理検査所見では腺腫内癌であり、周囲への浸潤は認めなかった。

## Session II 『膵 (I)』

### 5 術式によるS-1投与時の薬物動態の相違

宗岡 克樹・白井 良夫\*・佐々木正貴  
若井 俊文\*・坂田 純\*・神田 循吉\*\*  
若林 広行\*\*・畠山 勝義\*

新潟医療センター病院外科  
新潟大学大学院消化器・一般外科学分野\*  
新潟薬科大学薬学部臨床薬剤治療学\*\*

【目的】膵胆道癌の術後症例にS-1を投与する際に、その術式が5-FUの薬物動態に与える影響を検討する。

【方法】2003年1月以後、化学療法を施行した非切除・再発膵胆道癌24例を対象とした。原発は肝外胆管10例、膵臓6例、胆嚢5例、乳頭部3例であり、術式はPPPD6例、肝切除6例、バイパス4例、非切除8例であった。レジメンはS-1単剤であった。S-1投与後の最高血清5-FU濃度(Cmax)を測定し、術式との関係を検討した。治療期間は4~21か月(中央値8か月)であった。

【結果】術式ごとのCmaxではPPPDが非切除に比較して有意に高値を示した(P=0.026)。胃全摘後に術前よりS-1投与後の5-FUのCmaxが上昇し、ギメラシル濃度の上昇が関与すると報告があり、PPPDの際にも同様な機序が示唆された。

【結論】術式はS-1投与後の血清5-FU濃度に影響を与える。PPPD後の症例において血清5-